やめよ！徳山ダム

徳山ダム建設中止を求める会通信
No.88（2011.1.13）

事務局　TEL/FAX 0584-78-4119
大垣市田町1-20-1　近藤方

「関係地方公共団体からなる検討の場」　次々開催

前号でお伝えしたように、9月28日、国土交通省は83のダム・ダム関係事業についての「再検討」を、各事業主体に依頼（指示？）しました。全国各地で、「再検討」が始まっています。「できるだけダムに頼らない治水」という標語が見え隠れするものの、これまでの事業主体を検討の主体と位置づけています。そして「関係地方公共団体からなる検討の場」が主軸。これで本当に十分な見直し・再検討ができるでしょうか？　住民の声、河川工学以外の専門家の視点が活かさる保証がありません。補助ダム（県営ダム）の中には来年度予算での補助金獲得を目指して「やはりダムが最適」という結論を早々に出したものもいくつか出始めています。

そもそも流域住民に真っ当に事業の説明もしてこなかった事業ばかりです。事業主体と関係地方公共団体による「再検討」で、真に必要な見直しができるとは思えません。

岐阜県に関わるものとしては、内ヶ谷ダム（事業主体＝岐阜県）、木曽川水系連絡導水路（事業主体＝水資源機構）、新丸山ダム（事業主体＝国）について「関係地方公共団体からなる検討の場」が設置されました。

☆　内ヶ谷ダム　（検討主体＝岐阜県／長良川支流亀尾島川上端）

11月25日、「第1回 内ヶ谷ダム建設事業の関係地方公共団体からなる検討の場」が開催され、すぐ翌日から「ご意見募集」が始まりました。しかし岐阜県が公表・公開している一定まとまった資料は、この「第1回検討の場」資料だけしかありません。

長良川市民学習会・シンポジウム

「長良川に内ヶ谷ダムは必要か？」

- 2月5日（土）　13時30分 ～ 16時
- ハートフルスクエアG　大研修室

基調講演 ： 内ヶ谷ダムは洪水対策に有効か
講　師 ： 今本 博健 京大名誉教授

シンポジウム ： **長良川に内ヶ谷ダムは必要か？**
パネラー ： 須田道康（NPO法人ギンブナの会事務局長）
亀崎敬介（長良川水系・水を守る会事務局長）
コメンテーター ： 今本博健 京大名誉教授
コーディネーター ：武藤仁（長良川市民学習会事務局長）

主催：長良川市民学習会　（連絡先）武藤　090-1284-1298

岐阜県ＨＰを見、岐阜県河川課にも問い合わせをし、情報公開請求も行いました。期間延長の末に、１１月２２日になって、ようやく幾らかの文書の開示を受けましたが、分からないことだらけ、不十分です。つまりは流域住民・岐阜県民は、ほとんど何の説明もされず、資料も提供されないまま、「広く意見を聴いた」ことにされてしまう仕組みです。

他方、これまでこのダム計画に「丸適マーク」を与え続けてきた岐阜県事業評価監視委員会では、昨年６月から準備をし、「岐阜県独自の評価軸」というものまで出しています。この事業評価監視委から「検討の場」に２名の構成メンバーが出、さらに何度も事業評価監視から意見が聴かれることになっています。何重にも「予断あり」です。

私たちは､意見募集期間中の１２月９日－１０日、今本博健・京大名誉教授に来岐頂き、長良川を郡上に向かって遡りました。この調査行を経て、今本先生から「現在の国の方針である定量方式に基づいたとしても内ケ谷ダムの治水効果がきわめて限定的であり、建設するに値しない」という意見が岐阜県に出されました。（　→　２／５　シンポジウム）

重篤な金欠病の岐阜県です。こんな役立たずダムにＧＯサインを出してしまったら、すぐに対策を講じるべき危険な箇所が放置されてしまいます。岐阜県住民全体にとって危険です。

内ヶ谷ダムを中止させ、岐阜県の河川行政を転換する取り組み行っていきます。

☆　木曽川水系連絡導水路　（検討主体＝水資源機構・中部地方整備局）

１２月２２日午後に「第１回　木曽川水系連絡導水路事業の関係地方公共団体からなる検討の場　幹事会」が開催されました。午前中には新丸山ダムの「検討の場」がもたれています。

地方公共団体として最も負担の大きい愛知県と、それに次ぐ名古屋市。２月６日投開票の愛知県知事選と名古屋市長選を前にした「政治空白」の中での開催の意味は何なのでしょう？

当日の特徴的な発言を取り出し、コメントを記します。

＜岐阜県＞　「４６６世帯、１５００人の方々の犠牲があって徳山ダムは作られた。この方々の気持ちからすれば、徳山ダムの水を早く有効に使ってほしいので、導水路建設を促進してほしい」…　岐阜県のお役人が、徳山村の方々の気持ち云々するのは腹立たしい。「山林公有地化事業」が進まないのも、徳山村の方々が、岐阜県及び水機構・国交省に対して根底的な不信感もっているからではないか！！！　また、岐阜県は「愛知県や名古屋市は、早く徳山ダムの開発水を使うべきだ」と言える立場ではない。岐阜県が「大垣地域に必要だ」として（大垣地域の水道事業者と相談もせずに）確保した 1.2m3/S の水道水と 1.4m3/S の水を使う見通しは存在しない。全く以て「要らない水」だから、取水・導水・浄水施設計画の一片だになく、一般会計から償還している（異常事態！）。

「東濃・可茂地域の利水安全度向上のために導水路は不可欠だ」…　岐阜県はこの導水路事業には利水者としては参加していない。また、導水路事業の「異常渇水時の緊急水補給」は河川環境の改善のためであって「『計画上は』一滴たりとも水道水になることはない」（＝中部地

整河川部）のだ。だが中部地整河川部は逃げる、「…水系総合運用ができれば取水制限は大幅に減る」と。計画上は「ない」が幾つもの「～たら～れば」を重ねれば「ある」？？　建設のための屁理屈という他はない。「～たら～れば」を重ねる話なら、８９０億円の導水路建設より、「木曽川の水利用の新ルール作り」のほうがよほど現実的かつ合理的・効果的だ。

＜愛知県＞　「徳山ダムができちゃった導水路」論の全面展開。

「徳山ダムの水を使うことを前提に徳山ダム事業に参加した」「徳山ダム事業と導水路事業は一体だ」。「仮に導水路事業が中止となったら、徳山ダム事業費は返還して貰えるのか？」

息巻く愛知県に対して、中部地整河川部のＳ氏はツルっとおっしゃった。

「徳山ダムは、揖斐川の洪水調節及び流水の正常な機能の維持という形ですでにその機能と効果を発揮しています。また、発電所も建設中です。導水路事業は徳山ダム本体とはは一応別事業でございます」…　徳山ダムの「効果」は発揮されている？！？

＜三重県＞　「平六渇水のときにはシジミが多く死んで水産業に被害が出たから、導水路を作って異常渇水時の緊急水を確保してほしい」…　平六渇水のときにシジミが大量死したことと、木曽川大堰の流量との科学的因果関係は存在しない。河川管理者が作出した「根拠無き根拠」が大手をふってまかり通っている。

＜名古屋市＞　さすがに名古屋市長選を控えて慎重な発言に終始。どの市長候補もこの導水路事業には消極的、名古屋市は導水路事業の旗振り役にはならないだろう。が、”横並び”の面も捨てていない。今後の推移次第でどちらにも転べるように工夫したモノイイであった。

「検討の場　幹事会」資料２のＰ２４とＰ２５は「意味深」である。

岐阜県への共同緊急要請と今川・内ヶ谷

１１月２４日、当会を含む主として岐阜県の木曽川水系に足場をおいて活動する８つの市民団体団体が、岐阜県に対して、「長良川」に関する緊急の共同要請を行いました。

2010.11.25　岐阜新聞

「内ヶ谷ダム中止を」

環境8団体が県に要請

長良川市民学習会など八つの環境市民団体が24日、県に対し、国補助を受けて1983（昭和58）年度から建設を進めている内ケ谷ダム（郡上市大和町）の事業中止などを要請した。

同ダム事業について、県は国土交通相の要請に基づき、安全性やコスト面といった国の検証基準に沿って妥当性を評価する検討の場を25日に設置。来春までに対応方針を決めて国交相に報告する予定。団体は「不急の公共事業。県民への事業内容の説明が不十分なまま検討の時間を区切らないで」と訴えた。

同会代表の粕谷志郎岐阜大学教授らが県庁を訪れ、河川課長に要請書を提出。ほかに▽木曽川水系連絡導水路事業を白紙に戻すよう国に意見表明▽長良川河口堰（ぜき）のゲート試験開放に向けた国への働き掛け▽関市千疋で長良川から分流する今川が枯れた状況の説明と対策―の実施も求めた。

・・・・・・・・**要請事項**・・・・・・・・

１　「最優先で検討する」としている内ケ谷ダムについて、その事業の中味をきちんと説明すること。県民への説明が不十分なままに「来春までに検討結果を出す」などと時間を区切らないこと。

２　木曽川水系導水路事業計画を白紙に戻すことを、国に意見表明すること。

水資源機構が行うとされる「検討」が、透明性・公開性が担保されるものであることを、岐阜県として強く要求すること。

３　長良川河口堰のゲート試験開放に向けた働きかけをすること。

「長良川河口堰運用１５年」に関する県民（特に流域住民）の意識をしっかりと受けとめる場を丁寧に設けること。

４　「涸れた今川」の状況説明と対策について必要資料を揃えて説明すること。

・・・・・・・・

COP10　生物多様性交流フェア

２０１０年１０月、「市民による『豊かな海づくり大会』実行委員会」として参加しました。

主として長良川河口堰問題を訴え、全国各地、さらに国際的なの市民と交流することができました。長良川を流域住民・市民の手に取り戻すための大きな一歩となりました。

「長良川河口堰のゲートを上げよ！」の声は、市民権を得た、といえるでしょう。

2010.11.21 涸れた今川

「小さな命」救出作戦

後藤宮子先生が３０年間毎日続けて、登り落ち漁で魚類をとって記録を取られた今川。その今川に水がありません。地元のＮＰＯ法人ギンブナの会からのＳＯＳで、市民が動き、マスコミもとりあげました。

１１月２１日には、岐阜県美濃土木事務所がギンブナの会に呼びかける形で、橋脚の水たまりに残った生き物の「救出作戦」を行いました。多くの子ども達も集まりました。左の写真は、岐阜県博物館の学芸員から、生き物についての説明を聞いているところです。

2010年会計報告 （「長良川市民学習会」「導水路はいらない！愛知の会」への協力を含む）

収入　239,309（現金繰り越しを除く）
支出　389,595

支出内訳

通信費	118,131
郵送費	70,110
他団体の活動協力	82,240
資料・記録費	87,695
紙･文具･機械保守及び雑費	31,419

会としての残高	751,105
現金	9,396
郵便局	161,597
銀行	580,112 ＊
前年からの繰り越し	801,562
現金	44,487
郵便局	249,697
銀行	505,780

＊ 徳山ダム建設中止を求める会」の運動の記録を残す作業の一環として、法政大学サスティナビリオティ研究機構（サス研）・環境アーカイブズプロジェクトに資料を寄贈すると同時に寄付を行うという形で、徳山ダム裁判資料の保存と電子化を行いました。

弁護団費用残金　￥ 422,581、サス研へ寄付　￥ 350,000 → 銀行に＋￥ 74,332（振込手数料調整後）

１月３０日午後、法政大学市ヶ谷キャンパスでの第１３回サス研フォーラムで、事務局長・近藤ゆり子が発言します。詳細は事務局にお問い合わせ下さい（ブログにも載せます）。

「やめよ！徳山ダム」　徳山ダム建設中止を求める会　代表：上田武夫
公式 HP　http://www.tokuyamadam-chushi.net　事務局長ブログ　http://tokuyamad.exblog.jp/
編集責任：近藤ゆり子　事務局　〒 503-0875　**大垣市田町１－２０－１**
TEL/FAX　０５８４－７８－４１１９　Email：k-yuriko@octn.jp
郵便振替：00800-7-31632　年会費　１０００円　カンパ歓迎

今川 干上がった

関・長良川の分流

関市千疋で長良川から分流、岐阜市芥見で津保川と合流する今川が今夏以来、枯れ川状態が続き、河川環境への影響はもちろん、用水や川漁にも大打撃。地元の魚類研究家が30年間、調査を続けた現場も干からびた。長良川の出水で導流堤が壊れたためとみられ、県は9日から復旧工事にかかるが、「以前から水枯れ傾向」「ここ数年で悪化した」などと地元では周辺で進む治水事業との関連を問う声もある。（永井豪）

導流堤、8月大雨で流失

県河川課によると、8月9～14日の大雨で長さ230㍍、幅3・5㍍の導流堤の中間部分68㍍が流失。その後は本川に流れが偏り、今川は幅約100㍍、延長約3㌔のほぼ全川が枯れた。このため長良川と今川に囲まれた保戸島地区の農地約600㌶を潤す保戸島用水は取水不能となり、同用水組合ではホースが届く所まで水路を掘削、8月22日から10月8日までポンプ揚水を強いられる、過去に例のない事態となった。

同用水の篠田権三組合長は「10年以上前から渇水期はポンプに頼る時があったが、今回は完全に川が枯れた。昔から自然の流れで取水できたのに、なぜ今はできないのか。何とか復活してもらわないと」と、苦渋の表情。

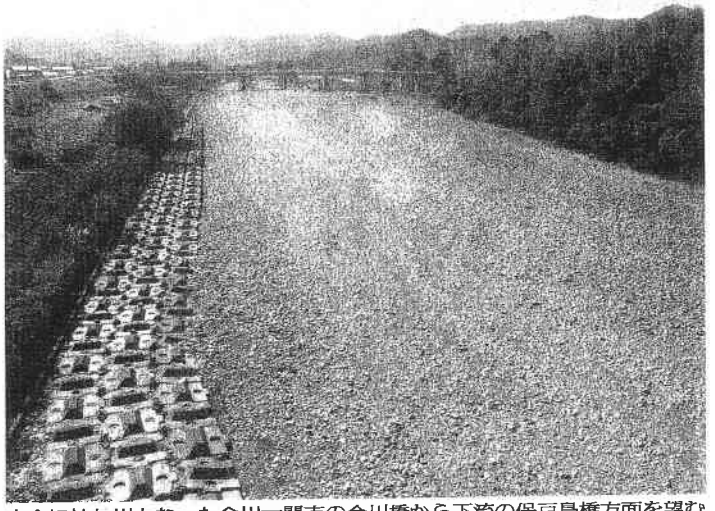
また、長良川中央漁協（美濃市）は「今川は登り落ち漁と瀬張り網漁、友釣りの漁場だが、枯れ川ではどうにもならない」と話す。

同市下白金の後藤宮子さん(85)は保戸島橋下流で1967（昭和42）年から30年間、登り落ち漁で捕えた魚類を記録。長良川中流の生物や生態系の変遷を知る貴重な資料となっているがその現場の水も消えた。

同所の男性(59)は「今年は雨が多かったが、洪水の心配は無かった反面、あちこちの改修で川の流れが変わり、ここ数年間で今川の河川環境はより悪化した」と言う。

県は台風23号豪雨災害（2004年）に対応するため、床上浸水対策特別緊急事業に06年度から着手。中流域では関市の鮎の瀬橋上流から岐阜市の藍川橋下流までの12㌔間で、河道掘削などの河川改修事業を進めている。

導流堤はコンクリートブロック製。90年代に今川の水量を確保するため当初、延長約110㍍が建設された。05年に約80㍍、昨年さらに約40㍍がいずれも下流側に延伸された。


完全に枯れ川となった今川＝関市の今川橋から下流の保戸島橋方面を望む

農業、漁業に大打撃　地元、環境悪化懸念も

今川　木曽川水系の一級河川。1566（永禄9）年の洪水で小瀬・小榮両村（関市）付近から南下する河道ができ、1782（天明2）年の洪水で現在のような河道に（岐阜県の地名）。

2010.11.22
中日新聞（岐阜県版）

残された生物 保護

関　水枯れの今川で児童ら

関市内を流れる長良川の分流、今川で二十一日、導流堤の損壊で干上がった川に取り残された生物の保護作業があった＝写真。

市内の児童ら百人が、県博物館の千藤克彦学芸員の指導で作業。今川橋の橋脚の周りに残っていた水たまり二カ所から、魚などをタモですくい上げてバケツなどに移し、種類や特徴などを観察した。捕まえた生物は本流に放流した。

作業では十九種類を確認。オイカワやナマズ、ギンブナのほか、県の準絶滅危惧種に指定されているヤリタナゴやイトモロコも見つかった。ブルーギルや琵琶湖に生息するギギなどの外来種もいた。（松崎晃子）

2010.11.10　中日新聞

今夏の豪雨後 水枯れる
関の今川を見学
住民ら

長良川の分流で、今夏の豪雨以降枯れ川となっていた今川の状態を確かめようと、環境保全に取り組む「長良川市民学習会」が九日、見学会を関市内で開いた。

今川は、関市千疋で長良川本流と分かれ、岐阜市芥見で津保川に合流する。県河川課によると、本流との分岐点にくさびを打つ形でせり出し、両川に流れを配分していたコンクリート製の導流堤の一部が七月中旬～八月中旬の豪雨で流された。以後、強い流れで土砂が削り取られ、河床が低くなっていた本流のみに流れが集中。分岐点から下流二・五キロが干上がった。

今川の水を農業用に引いていた地域には水が行き渡らなくなり、住民は八月以降、本流との分岐点近くから導水路を掘りポンプで取水して対応してきた。漁場がなくなったことによるアユ漁などへの影響も心配され、県は流れを戻すため、導流堤の復旧工事を九日から始めた。

見学会には、県内の環境団体や地元住民ら十人が参加。導流堤が流された現場や、近くの本流で、県が水害対策のため進めている河道掘削工事を見て回った。

学習会の武藤仁事務局長(六〇)は「河川は環境も利水も大事だが、枯れてしまってはすべてを失ってしまう。今川の河床は本流の水位より高い。導流堤の修復だけでない、根本的な対策が必要だ」と話した。（中尾吟）

干上がった河床を歩く参加者＝関市戸田で

岐阜新聞　2010年(平成22年)11月2日　火曜日

細川内ダム計画中止10年
国との闘い一冊に
元木頭村長 藤田さんが回顧録

建設省（現国土交通省）が木頭村（現那賀町）で進めた細川内ダム計画が中止となってから11月で丸10年となるのに合わせ、当時村長として計画に反対した藤田恵さん(71)＝神戸市＝による回顧録「国を破りて山河あり」（四六判、192ページ、小学館）が出版された。藤田さんがダム計画中止へ向けて奔走した様子を秘話を交えて述懐している。

藤田恵さん

藤田さんは1993年4月に「ダム反対」を掲げて村長に当選し、建設省、県と真っ向から対立した。「動き出した公共事業は止まらない」と言われた時代だったが、2000年11月に扇千景建設相（当時）が「中止」を宣言。国の大規模ダム計画で初めて中止されたとして全国的な注目を集めた。回顧録では、藤田さんがその過程を中心に口述スタイルで紹介した。

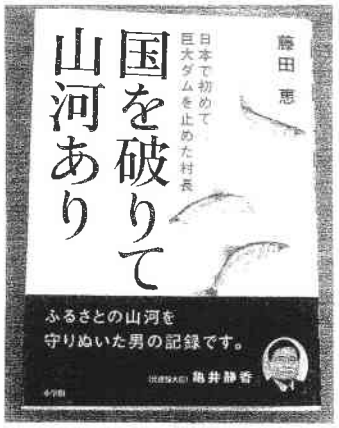
ダム反対一色とみられた村だったが、藤田さんには「3分の1が絶対反対、3分の1が容認、3分の1がどっちつかず」に映ったといい、村内外のあつれきに苦労した状況を振り返っている。

腐心したのが人脈づくり。特に「ダムを止めるには国会議員を動かすしかない」と、村長就任前に労働組合運動をしたころのつてを頼って働き掛けに力を注いだ。

人脈を駆使し、亀井静香建設相（当時）に「中止」寄りの答弁を働き掛けた逸話も。亀井氏は1997年3月の参院予算委で「任期中に結論」と、後の「一時休止」につながる答弁をした。

藤田さんは「よくあんなことができたなあ、とあらためて思う。経緯を多くの人に知ってほしい」と話している。

「国を破りて山河あり」は1470円。



元木頭村長の藤田恵さんが出版した「国を破りて山河あり」

社説

2010・12・18

2010.12.18　中日新聞

東海のダム検証

予断を捨て議論しよう

設楽ダムなど国土交通省、水資源機構が施工する東海地方のダム事業の検証が始まった。関係自治体から「今さら何を」の声もあるが、悔いのないよう予断を排し、あらためて議論を進めたい。

設楽ダム（愛知県）は、検証主体の国交省中部地方整備局と七自治体の参加する「関係地方公共団体からなる検討の場」が、すでに開かれている。

新丸山ダム（岐阜県）は同局と八自治体、木曽川水系連絡導水路（岐阜県－愛知県）は同局、水資源機構中部支社と十三自治体からなる「検討の場」幹事会を二十二日に開く。

設楽ダム検討の場では整備局側が、ダムに代わる治水対策として河道掘削や霞堤、利水では水系間導水、既得水利の転用など複数の手法を説明した。一方、事業推進の自治体首長からは「設楽ダムは検討し尽くした。これ以上の検証は無駄」との声が続いた。

ダムサイト予定地の設楽町長は「三十七年かけ真剣に議論し、補償基準妥結、建設同意に至った。それが認められないなら途方にくれる状況だ」と訴えた。

長い間事業計画に翻弄され、生活の場が水没で移転を決断した住民らの心情は、十分理解することが大切だ。設楽と並び注目の八ツ場ダム（群馬県）は、先に馬淵澄夫国土交通相が建設中止の前提を事実上、撤回した。むしろ「予断なき検証」の趣旨に合致するともいえる。

しかし設楽を初めから検証不要で議論を封じ込めれば、「ダムありき」の逆の〝予断〟に陥る。ダムの造られる豊川水系の河川整備計画で想定された基準点、愛知県新城市石田の大洪水時計画流量毎秒七千百立方㍍の根拠は確実か。また設楽ダムで毎秒千二百五十立方㍍が調節できるのか。

近い将来の水需要の想定は過大ではないか。総貯水量九千八百万立方㍍のうち六千万立方㍍が「流水の正常な機能維持の流量」とされているのも十分な説明がされていない。

整備局側が全ての基礎的資料を公開した上で、自治体も住民も思う存分に意見をぶつけ、検証を進めてほしい。結論がどうであれ、事業の影響を受ける住民の生活再建に目配りは当然である。

既設ダムの再開発である新丸山ダム、未着工で地下ルートが大部分の木曽川水系連絡導水路は、設楽のような住民の生活に直結する深刻な問題は少ない。より冷静な検証作業を期待する。

中日新聞　2010.12.23　岐阜県版

木曽川導水路、新丸山ダム

「検討の場」初開催

県など参加

国のダム事業見直しを受け、中部地方整備局は二十二日、徳山ダムの水を木曽川に流す木曽川水系連絡導水路と、新丸山ダム（御嵩、八百津町）の在り方を検証する初の「検討の場」を名古屋市内で開いた。

岐阜、愛知、三重県や名古屋市などの関係自治体が出席。整備局側が検証の手続きや事業概要を説明した。導水路の検証では、自治体側から「検証は時間を掛けず速やかに」「導水路事業を早く進めて」といった意見が出た。取りまとめ時期のめどは立っていない。

導水路は、揖斐川と木曽川を全長四十三キロの地下トンネルで結び、徳山ダムの水を流す計画で、総事業費八百九十億円。新丸山ダムは木曽川下流の治水や発電を目的に現在の丸山ダムをかさ上げする再開発ダムで、総事業費は千八百億円。いずれも本体着工していない。

ダム事業見直しでは、民主党の「できるだけダムに頼らない治水」への政策転換に伴い、全国の事業で代替案やコストなどの検証が始まっている。

©中日新

長良川

河口堰開門 倍増へ

来年度から 放流で環境改善

国土交通省と水資源機構は長良川河口堰（三重県桑名市）上流の水質保全のため、ゲートを上げて一時的に放流量を増やす「フラッシュ操作」の回数を来年度から倍増する方針を固めた。夏場に酸素が欠乏する底層部分に新鮮な水を流し、魚や貝類など底生生物が生存しやすい環境づくりを目指す。

→

これは市民の求めるゲート開放ではない。これでは汽水域は復活しない。

徳山ダによる生態系破壊は進行している。

← ↓

2010.11.26　中日新聞（岐阜県版）

治水効果や代替案説明

内ケ谷ダム 県の検討会 初会合

国の補助ダムで建設見直しの対象となっている内ケ谷ダム（郡上市）を検証するため、県は二十五日、県庁で関係自治体の市長らを集めた検討会の初会合を開いた。県はダムの治水効果を説明するとともに、遊水地の確保や河道掘削など二十五の代替案を示した。

検討会は西藤公司副知事や関、郡上、美濃の各市長、岐阜市副市長らで構成。国は検証作業の中でダム以外の洪水対策も検討し、コストや実現性など七つの評価軸に添って総合的に比較評価することを求めている。

県は評価の対象となる対策として、ダムと代替案を提示。ダム建設は実現可能で治水効果もあると指摘した。代替案では遊水地や河道の掘削、堤防のかさ上げなどに治水効果があると説明。ほかに治水効果は不確かとしながら、水田や池、沼などの遊水機能を生かす方策も挙げた。

尾藤義昭関市長は「堤防のかさ上げは難しく、立ち退きも必要。水の調節のため、好むと好まざるとダムに頼るしかない」と述べた。市民団体「長良川市民学習会」の武藤仁事務局長は会議を傍聴して「ダムありきで進んでいく感じを受けた」と語った。

徳山ダム カワウ急増

昨年まで数羽 今年149羽

揖斐川町の徳山ダムで、これまで繁殖期の6月に数羽しか確認されていなかったカワウが、今年は149羽も見つかり、繁殖地になっていることが分かった。食害が問題となるカワウだけに、今後の生態系への影響が懸念されている。（中崎裕）

調査結果の報告を聞く委員たち＝名古屋市内で

二〇〇六年に試験湛水を始めたダムで、湛水による環境の変化を調べるため水資源機構中部支社が水鳥を調査。カワウはダムに水がたまって一年目の〇七年はゼロ、二年目の〇八年も六羽だったが、今年六月には百四十九羽が確認された。

魚のエサ増える？ 生態系への影響懸念

機構は二十四日、名古屋市で開いたダムによる環境変化を調べるフォローアップ委員会「徳山ダムモニタリング部会」で有識者の委員に急増を報告。委員からは「エサとなる魚がダム湖で急増しているといった変化があるのではないか。生態系全体がどう変わっていくか、きっちり見ていく必要がある」との指摘が出た。

機構は「繁殖地状態が続くか継続調査が必要」として水鳥の調査を継続するとともに、二〇一四年に予定していたダム湖の魚類調査の前倒しを検討することを決めた。

カワウは全国的に食害が問題となっており、別の委員からは「カワウ対策も早めに検討すべきではないか」との意見も出た。

2010.11.05　中日新聞

外来コカナダモ駆除

アユ生育阻害 地元中学生ら作業

揖斐川

アユの生息に悪影響を与える外来種コカナダモの駆除作業が四日、揖斐川町岡島の揖斐川で繰り広げられた。揖斐川では上流の徳山ダムが完成した二〇〇八年ごろからコカナダモが急に増え始め、漁業関係者が危機感を募らせていた。

コカナダモは北米原産の沈水植物で、アユのエサとなる水ごけを覆ってしまう。揖斐川中部漁協によると昨年は特に繁殖量が多く、アユの漁獲量は他地域と比べ低迷。今年も状況は悪化しており、サイズの小さいアユが目立つ。

この日の駆除作業は、川の水量が減る用水取水ゲートの点検に合わせて実施。漁協組合員や地元中学生、県、町の職員など約百人が川に入り、約四時間かけて一面に広がるコカナダモを引き抜いた。

揖斐川中部漁協の石原潤一郎組合長（五四）は、コカナダモの大繁殖について「温暖化や富栄養化など要因はいろいろ考えられるが、ダム稼働で水量が一定になり、範囲が一気に広がった可能性もある」と話した。

同漁協のアユ漁獲量はダム完成前の二〇〇七年度が二十四トンだったのに対し、本格稼働後は〇八年度が十二トン、〇九年度が一〇・八トンと半分に落ち込んでいる。（岡本太）

一面に広がるコカナダモを引き抜く中学生＝揖斐川町岡島で